

Shiripaの星

北星学園余市高等学校同窓会誌



『今の自分の考え』

株式会社おおし

代表取締役 大橋 明敏（二三期）

私は北星学園余市高等学校第一三期卒業です。卒業して早三十余年が経ちました。

私は地元に残り、自営で印刷業をしていた父親の後を継いで、この余市で「一般印刷・事務機・事務用品」を取扱う株式会社おおしを経営しています。

商売柄、何かと北星余市高校にはお世話になっております。自分も、数年前までは学校にお邪魔して、事務室はもちろん職員室にも行っておりましたが、担当地域から外れてからは年に数回程度になり、気が付くと学生時代の顔見知りの先生方は定年退職されていきました。今ではほとんど顔と名前の一致しない若い先生方と



なり、自分の気持ちと裏腹に、自分も歳をとったなあと思うこの頃です。

私は本来原稿など書くのが苦手で、依頼を戴いた時も最初は断ろうと思いましたが、いろいろとお世話になっている一ツ上の先輩からの電話での頼み事でしたので簡単にお引き受けしました。いざパソコンに向かい、原稿依頼内容の「近況報告など」を考えながら進めようとしたのですが、何を書こうかと迷いながらの作業になりました。

今振り返ってみれば、「学生時代が一番楽しい時代だなあ、と思う時が必ず来る」と先生や両親に言われていたことを思い出し、ております。今この不景気の時代に、どうやって父親の後を継いだ会社を潰さず、一緒に働いて頂いてる従業員の生活を守って行けばいいのか、又日々年老いていく両親をどう見守って行けばいいのかと思うこの頃です。卒業当時の自分では考えもしないことでしよう。私は仕事柄色々人々と出会うことができましたので様々なアドバイスを聞くことができましたが、幸いです。学生時代は、がむしゃらに突っ走ること必要ですが、先輩たちの助言を素直に聞くことも必要だと思っております。

最後になりますが北星高校の学生時代にお世話になった諸先生方はじめ社会の人たちにこれからも恥じない生き方をしたいと思っています。今後の目標は、十年・二十年と、今の会社が地元余市のみなさんと北星余市高校のお力をお借りして「北星学園余市高等学校」と共に地域社会にお役に立っていいと思います。



『母校と再び、そしてこれから』

二期 安田 亜子 (旧姓 河崎)

私は現在、高校時代と変わらず、大好きな積丹ブルーの海を抱きながら家族と共に生まれ育った後志の積丹町で暮らしています。

同じく海が好きだった亡き父が、大学進学を見据え、北星余市高校への進学を勧めてくれたお陰で「人はそれぞれ違うこと。そして、それはとてもかけがえないこと。違う者同士が相互理解・相互援助を通じて学び合い支え合うことができた時、一人ひとりが生かされること。」を母校での三年間、仲間や先生方から学ぶことに恵まれました。

大学卒業後、ソーシャルワーカーとして勤務した民間の精神病院で、日本の福祉施策の遅れゆえ、地域から隔離され長期入院を余儀なくされている精神障がいを経験した方々と幸いに出会うことができました。支援に携わる経験を得たことで、母校で学んだ「相互理解・相互援助」は、障がいを持つ人達が地域で生かされ暮らしていく上でも大事な価値観だと学びを深め、今日まで福祉の領域で仕事をしています。

三年前、これまでの経験を地域で生かしたいと思い、病院を退職し、北後志を



対象圏域とする相談支援事業所(しりべし圏域総合支援センター)に勤めました。障がいを持つ方々をはじめ、ひきこ



もりや不登校など、生きることの苦勞を抱える方々との出会いが増え、抱える苦勞の本質は、往々にして、その方々を取り巻く地域や社会の中にあり、又、その回復を支援する上で、教育も医療も福祉も、テリトリーを超えて繋がり、互いに支え合う仕組みが必要だと再認識しました。二年前、行政の方々と協力し「北後志地域自立支援協議会」という地域関係機関が集まる組織を作り、現在、北後志の様々な機関の皆さんと、北後志の地域づくりを目的にソーシャルネットワークキングを行っています。今年、その活動に北星余市高校の先生方も加わって下さり、卒業し二十年以上が経った今、再び先生方と、語り学び合える機会に恵まれ母校を身近に感じながら日々努めています。

これからも、母校のある地域の中で、母校とともに、そして、出会いを大切に、地道に歩んでいきたいと思っています。

最後に、本誌への投稿について声をかけて下さった母校の先輩に感謝します。

君達と出逢って。

三期 久慈 美香 (旧姓 橘)

二〇一二年三月三十日、午前六時頃に陣痛が始まり、午後四時五十四分、三〇四四gの元気な子を無事に出産。

私と夫との出逢いは十五歳の春。

一九九九年に北星高校に入学、ここで大切な方々との出逢い、先生方、友達、洋ちゃん(夫)

あの頃は、なんで私こんな遠い所まで来たんだらう、来たいって思ってしまったんだらう。なんて思ったこともありましたが、でも今は北星に来て、大切な出逢いがあった、一緒に過ごせてよかった。

北星卒業後も、洋ちゃん(夫)とはずっと友達で、洋ちゃんは沖縄と札幌を行ったり来たり。私は札幌での生活でしたが長い友達期間を経て、付き合うことになったのです。付き合っていたころは、洋ちゃんがよく行っていた沖縄の与那国島に二人で出稼ぎに行き、サトウキビの製糖工場での仕事、居酒屋

での仕事、牛の世話、畑仕事の手伝いなど、島での暮らしは貴重なものがありました。

北海道とは違った自然の美しさ、海ってこんなに美しいものなんだってこと、仕事終わりに暑くて疲れて服のまま海へドボン!!なんてすごく気持ちよくて。ビックリしたことは、可愛い与那国馬や、牛が道を普通に歩いていること、でもそれがまた、青い海、空、緑とマッチして、こんなきれいな所があるんだ!ってすごく感動したことを覚えています。島には無くて困ることもいっぱいあったけど、島にしかない美しさ、感動もいっぱいでした。

島を出た後は、青春18きっぷで、九州、北海道までの電車の旅。洋ちゃんにいろんな所に連れて行ってもらい、いろんな経験もできて、一緒に楽しくて。

そして四年間の付き合いの後、結婚、妊娠、出産。今は七カ月になる男の子、私達にとっては大切な命が元気に育っています。太陽の様にキラキラと、まわりを明るく元気にできる様な笑顔で育ってほしいと願い、「陽太」と名付けました。妊娠中は、切迫早産で二カ月の入院、二十四時間の点滴

生活、心配で、辛くて、苦しい日もありました。出産も思っていたより壮絶、全てが痛くて辛くて、でも無事に産むことができました。

初めて見る我が子は、赤くて、シワシワ、「ガッツミたい」(笑)。陽太との初出逢い。子育ても分からないことばかり、大変、心配。でもそれ以上に可愛い、愛しい、大切、一つ一つが嬉しい。私達の所に来



てくれて、産まれて来てくれてありがと。つて。私達の親もこんな風に思って育ててくれたんだって感謝、産んでくれてありがと。

そして、北星に来なければ、みんなとの出逢い、洋ちゃんとの出逢いもなく、陽太

『時が流れても』

教員OB 加藤 正二

ラグビーの精神に「One for all, for all」と「ノー・サイド」がある。先日、パリーグCSの第三戦、ソフトバンクを破り、日本ハムが日本シリーズ進出を決めた。試合後、小久保の引退を祝福し、日ハムの選手達も一緒に胴上げした。その片隅で、秋山監督が糸井の肩を抱くように叩いていた。

試合が終れば敵も味方もない。同じ競技者として互いの健闘を称える。スポーツの爽やかさを久々に目にした思いだった。何の奇遇か、神のお導きか、二十七歳でここ北海道、北星余市高に職を得て、三十四年間、いろんな人々に支えられながら定年を迎えることができました。

思えば、最初の担任は二期生。ほぼ全員地元、後志の生徒だった。一七期の時は札幌勢が加わり、一三期には内地からも多くの仲間が増える。二八期は、北海道勢とほぼ半々となる。三四期、三九期と六回の卒業生を持たせてもらった。

その間、幾多の出会いと別れがあり、語り尽さない喜びも難い、北星余市



とも逢えてなかった、北星の出逢いに感謝。「ありがとうございました。」

※久慈洋平くんは、現在札幌市清掃局職員として仕事、子育てを頑張っています

高という家族の一員として共有できたことに感謝しています。

今年、定年四年目。夏は畑、冬は雪かき、本読んで映画観て、毎晩酒を飲みながらジャズを聞いて日々が過ぎていきます。これでもいいのかと模索の日々が流れていきます。同窓の皆さんのますますの健闘を陰ながらいつもいつまでも応援しています。



(写真左から 加藤先生、吉田先生、山先生、佐々木先生—いずれも教員OB)

『社会人一年目の決意』

四一期 林田 健治

二〇〇八年三月一日、私は第四一期生として北星余市を卒業しました。卒業後は明治学院大学国際学部へ進学し、東南・東アジアの開発経済を専攻する傍ら、ベトナム・ミャンマーの子どもたちへの教育のサポートに従事していました。また、中国に二ヶ月間住み込みで働きながら語学学校へ通ったり、アジアを旅したりと、本当に色々な経験をさせて頂きました。

そして大学を卒業して社会人一年目となったいま、教育・出版関係の民間企業に就職し、札幌に配属されたことをきっかけにまた北海道に戻ってきました。仕事内容は、高校を訪問し、教材などを通じて高校生の勉強や進路選択をサポートする仕事になります。たまに生徒向けに講演などをすることもあります。勉強熱心な子もいれば、もちろんそうでない子もたくさんいて、そんな高校生たちを毎日見る度に北星余市での日々を思い出します。北星余市に入学した頃は自分の将来など全く見えず、他人を思いやることもできなかった私が、こうして「高校生のために」と考えられるようになったのも、北星余市の三年間で本当に様々な人に出会い、他人を尊重し、そして自分を認めることができたように思います。

付かせてくれたのが、北星余市でした。そしていまは、人生を通して、国籍・宗教・文化を超え、世界中の人と「一人の人間」として向き合い、心から付き合える仲間をたくさん創るという目標を持っています。昨今、近隣諸国との関係も色々と言われていますが、友だちがいる国を嫌いにはなれません。これも、北星余市の三年間で、過去なんか関係なくありのままの自分で付き合える人間関係を学んだからでしょうか。

いま、私の周りには、前を向いて頑張っている卒業生がたくさんいます。日々悩みながら必死にもがいている卒業生もたくさんいます。

社会は厳しいですが、北星余市でもらった力を胸に、卒業生として後輩たちの一筋の光となるように、これからも全力で生きていきます。



認めることができてきたようになってきたからなのだと思います。自分を好きになり、人を好きになる。人間らしいこんな気持ちに気が



岩本孝一先生を偲んで

七期 伊藤 賢治

岩本先生にお会いしたのは四十一年以上前の高校一年の時。スリッパをパタパタと鳴らしながら体育館のステージに立つと、独特の関西弁で自己紹介と抱負を語る。今まで見かけた事の無い一風変わった先生というのが第一印象だった。

まさかこの先生が二年三年の担任になるとは想像もしなかったし、ましてや自分の人生にとってかけがえのない大きな存在になる事など、全く思ってもいなかった。

岩本先生は生徒一人一人の声に耳を傾け、長所短所を捉えその生徒にあった細やかな指導をしていた。

また、父母とのコミュニケーションも絶妙で、いい塩梅の関係をすぐに構築してしまう天才でもあった。

家庭訪問に来た時など、父母に自分の事をこれでもかというほど褒めちぎる。

すっかり気を良くした父と酌み交わす酒は、この上なく旨い酒であったと思うし、今思っても微笑ましい光景としてその場面が蘇ってくる。

岩本孝一先生は私の進むべき道を、絶えず照らし続けてくれた先生でもあった。

「行動から学べ」「深く考えよ」は、岩本先生から頂いた大切な言葉で座右の銘でもある。

全国の中退学者を受け入れようという、日本の教育界に放った閃光は、行き場を失った生徒や父母に暖かな希望の陽光として受け入れられ、余市の人々の大きな心によって支えられた。

まさに革新的な教育を全国規模にまで押し上げて行った岩本先生の功績は、大きく賞賛に値するものと確信する。

自らが行動から学び深く考え実践した結晶なのだと思う。北星学園余市高校の卒業生である事、そして岩本孝一先生の教え子である事に誇りを感じる。

岩本先生から頂いたご恩を生涯忘れる事なく、しっかりと前に向かって進みたいと思う。

岩本孝一先生ありがとうございました。

そして大好きなGANさんさようなら。



▲北星祭(学校前にて)

フルーツシャワー開園祭
馬場元校長先生と▼



SNSを用いた同窓生のつながりの可能性

北星学園余市高等学校校長 安河内 敏

ある日、メールのチェックをしていたら、在校生のお母さんから「お友達申請がきています」というメッセージがあり、そこにクリックするところがあつたので、ぼちぼち押していたら、facebookの画面がでてきました。そしてなんだかいろいろと登録やら、またいろいろ押しているうちにどうやら、facebookのメンバーになったようで、その後在校生の父母、卒業生の父母、近間に卒業した同窓生、在校生、二年前、三年前に出した卒業生……という順番でお友達申請が来て、ちゃんと身元のわかった人からお友達になってすでに三七七人(一番古い期は一七期生)。そのほとんどが北星余市関係です。日々流れてくる皆さんのニュースフィードを眺めていると「結婚しました」、「子どもと旅行に行きました」、「こんな仕事をしています」……など実に多様な同窓生の様子がすぐにわかるのです。最初はITに懐疑的であった私も「これを使わない手はない」と思うようになりました。今回の同窓会報への寄稿もfacebookが活躍しました。今では同窓生同志をつなげたり、在校生に卒業生の世間の渡り方をレクチャーしてもらったり、全国に散っている同窓生がつながりを持ち始めています。今の世の中なりにつなぐよりも一度大切にすることが、一人一人の力になると確信しています。北星余市という共通の土壌があればものすごい可能性を秘めていると思うのです。



2012 年秋、シリパの星 No.12 の原稿と写真が集まりました。貫禄が出てすっかり社長顔になった大橋さん(やんちゃ顔が懐かしいです)、結婚後も仕事を頑張っている安田さん(私もずっと「兼業」主婦です)、北星余市で出会って家族になった久慈くん夫妻(私と夫も「北星余市」で出会いました)、相変わらず優しい笑顔の加藤先生(しょんちゃんさんのほんわかムードは健在ですね)、立派な社会人になった林田くん(母の思いで心配していました)、そして最期まで「GUN さん」だった岩本先生(長い闘病生活本当

編集後記

2012 年秋、シリパの星 No.12 の原稿と写真が集まりました。

貫禄が出てすっかり社長顔になった大橋さん(やんちゃ顔が懐かしいです)、結婚後も仕事を頑張っている安田さん(私もずっと「兼業」主婦です)、北星余市で出会って家族になった久慈くん夫妻(私と夫も「北星余市」で出会いました)、相変わらず優しい笑顔の加藤先生(しょんちゃんさんのほんわかムードは健在ですね)、立派な社会人になった林田くん(母の思いで心配していました)、そして最期まで「GUN さん」だった岩本先生(長い闘病生活本当

にお疲れ様でした)、皆の笑顔が輝いています。

編集作業中のある日、アイワード(本紙の印刷業者さん)の営業担当の方が「この方(昔の写真)って、本当にこの方(現在の写真)で間違いないですよな」と恐る恐る聞いてきました。私は4年前の対談(シリパの星のNo.8 参照)の場面を思い出しながら嬉々として答えました。

「間違いないですよ。人間って本当にいい顔になるんですよね〜!」(林田くん、本当にいい男になったね!)

皆さん、今回も素敵な笑顔をありがとうございました。(え)

教員		計	
一期	岩本 孝一先生	1111	1
二期	富岡 剛さん	1111	1
三期	薄田 彰さん	1111	1
六期	薄田 彰さん	195	20

お詫ひ
昨年号に掲載した小助川計さんは一八期の間違いでした

お悔み申し上げます。

同窓会員奨学金について

今年度は卒業生のお子さん2名が奨学金を受けました。

金澤 智美さん(旧藤田) 一六期 三年 友也君
長尾 忍さん(旧川端) 二六期 二年 ひなよさん

Shiripaの星

Vol.12
2013年1月1日発行

【発行】北星学園余市高等学校同窓会「シリパの星」編集委員会
〒046-0003 余市郡余市町黒川町 19 丁目 2 番地 1
TEL(0135)23-2165 FAX(0135)22-6097
URL <http://www.hokusei-y-h.ed.jp/>

顧問 塚原 治
編集長 松村 悦子(15期)
副編集長 松浦 一法(12期)
編集委員 安藤 栄子(1期)
本間美智子(5期)
馬場 希(12期)
平野満寿美(14期)